

永田勝栄

「ドミノ」

登場人物

上島竜彦 (36) テレビディレクター

上島彩美 (35) 上島の同僚で元妻

川藤翔樹 (28) 上島の同僚

山川秀明 (45) 芸人

管理人

水田善人 (声のみ)

○世田谷総合体育館・アリーナ・中（深夜）

バスケットコートがある広い体育館。

観覧席も何百席とある。

消灯され、月夜に照らされた5万個の
ドミノが並んでいる。

花火など夏の風物詩に象られたものや、
様々な仕掛けも施されている。

中心部分には、巨大な立体ドミノタワー
が立っている。高さ2メートルほど。
誰かの手がドミノをデコピンする。

ドミノは勢いよく倒れ進み、花火の絵
が浮かび上がる。
止まらないドミノ。

○タイトル『ドミノ』

○アパート・上島の部屋・寝室（早朝）

上島竜彦（36）がベッドで寝ている。
携帯が鳴る。

眠そうに目を開き、携帯を確認する。

『水田善人』からの着信である。

軽く驚き、すぐに電話に出る上島。

上島「はい、上島で」

と、すぐに通話を切られる。

上島「何だよ」

すぐに水田から、無料通信アプリで長

文が送られてくる。

上島、それを見て驚き、

上島「マジかよ！」

と、急いで起き上がる。

○世田谷総合体育館・外観（朝）

日差しが強く、セミが鳴いている。

○同・アリーナ（朝）

3分の1程度のドミノが倒れている。

上島が一人、ドミノを一つずつ立て直している。上島、舌打ちして、

上島「無理に決まってるだろ」

体育館の扉が開き、川藤翔樹（26）

が入ってくる。

A D つぼくウエストポーチを腰に着け、
ガムテープなどぶら下げている。

川藤、倒れたドミノを見て、

川藤「うわっ！ マジで倒されてんじゃん」
と、驚愕する。

上島、川藤に振り向いて、

上島「お前か。早く手伝ってくれ」

と言つて、またドミノを直し始める。

川藤「お疲れっす。てかここ熱っ」

上島、ドミノを直しながら、

上島「エアコン、壊されてた」

川藤「マジで言ってます？」

上島「マジだ」

○同・入り口前・外（朝）

アリーナ入り口付近にあるエアコンの
スイッチ。カバーごと無理やり取り出
され、中の電線が切られている。

上島の声「熱中症には気を付けろ」

○同・中（朝）

川藤が上島の近くでドミノを立て直している。

川藤「誰がやったんすかそれ。マジヤバくないっすか？」

上島「知らないよ」

川藤、倒れているドミノを見渡ししながら、

川藤「これ、絶対無理ゲーでしょ。本番まで絶対間に合わないっすよ」

上島「間に合わせるしかないんだよ」

川藤「でも、キャスト20人が交代交代で並べて、28時間かかったんすよ？」

上島「分かってるよ！　しょうがないだろ、水田さんがそう言ってんだから」

川藤「マジっすか？　俺にも見させてくださいよ、水田さんのメール」

上島、携帯を取り出し、水田とのトーク画面を開き、川藤に見せる。

上島「ほら」

川藤、携帯を受け取り、メールを読み、川藤「ドミノが誰かに倒された。至急現場に向かってほしい。呼んでいいスタッフは彩美、川藤、芸人の山川秀明の3人だけで頼む。この件は決して口外しないように」
ドミノを直している上島。

川藤「俺は忙しくて現場には行けない。電話も当分出れない。すまない」

○同・管理事務所・前（朝）

ドアに『管理事務所』と書かれたプレート。
ト。

○同・中（朝）

管理人が一人にいる。

『世田谷総合体育館』と書かれた掲示板がある。

8月22、23、24日の『アリーナ』の欄に『48時間テレビ様・終日・貸切』と書かれている。

○同・アリーナ・入口前・中（朝）

上島と川藤が黙々とドミノを立て直している。

入口の扉が開き、上島彩美（35）が入ってくる。彩美に振り向く二人。

川藤、上島と彩美を交互に見て、

川藤「出た。彩美さんだ」

ドミノ直しに戻る上島。

彩美、倒れているドミノを見渡し、驚きながら、

彩美「かなり倒れてる」

倒れた列に向かう彩美。

彩美、通りがかった川藤に向かって、

彩美「お疲れ」

川藤「お疲れさまです」

上島には見向きもせず、立て直しに取り掛かる彩美。すぐに何かに気づき、周りのドミノを見渡す。

彩美「ストッパーは？」

川藤「あ！ 確かに」

上島「俺が最初に来た時から抜かれてた」

川藤「え、それヤバくないっすか？」

彩美、腕時計を確認し、

彩美「本番まで、あと11時間ぐらい」

上島「他のスタッフの入り時間考えると、実

質8時間ぐらいだ」

川藤「そっか、他のスタッフにバレちゃいけないのでしたっけ」

上島「倒されたのは3分の1ぐらいだ。死ぬ気でやれば、もしかしたら間に合うかも」

彩美、上島の方を見ずドミノを立てながら、

彩美「いいから手動かして」

アリーナの掛け時計は8時33分を指している。

彩美の声「本番は、19時半からよ」

扉が勢いよく開き、山川秀明（45）

が入ってくる。山川に振り向く三人。

すでに汗だくの山川、頭を下げながら、

山川「しゅ、すいません！ すいません！

遅れました！」

川藤「出た、山川秀明」

山川「た、体育館の中で迷っちゃって、体

育館の中に入ってもさらに体育館がいつ

ぱいあるから、もう全然分かんなくって大

変でしたより！ この体育館」

川藤「いや何回体育館って言うんだよ」

山川、床に並ぶドミノに気づかず歩き

ながら、

山川「あ、上島さんに彩美さんも、そ、それ
に君は、えーつと、えーつと」

ドミノを蹴りそうになる山川。

彩美「（大声で）足元！」

山川、過剰に驚き、

山川「うわー！ 何すか何すか！」

と、後ずさる。

彩美「足元、気を付けて下さい」

山川、下を見て、

山川「あくそっかそっか！ 忘れてたドミノ
だ。あつぶねー、すいません俺馬鹿過ぎて」

と、頭を搔きながら、ニコツと笑う。

川藤、彩美に近付き、小声で、

川藤「何で山川さんなんすかね？ スタッフ

じゃないのに」

彩美「知らないわよ。一応出演者ではあるけど」

川藤「え？ 出てましたっけ？」

彩美「出てるわよ。昨日の深夜帯に5分だけ。

私が出演交渉したんだから」

川藤「マジっすか？」

○同・入り口前・外（朝）

管理人が掃き掃除をしている。

日差しが強く、セミが鳴いている。

汗を拭う管理人。

○同・アリーナ・中（朝）

黙々と修復を進める上島達4人。

掛け時計は9時36分を指している。

川藤が汗を拭い、ペットボトル飲料を

勢いよく飲み、

川藤「ふう、あっちい」

上島はドミノを直しながら、彩美をさりげなく見つめる。

彩美、直しながら川藤に向かって、

彩美「みずみ、あいや、水田さんに連絡してみた？」

川藤「いや、してないっす。彩美さんしたんすか？」

彩美「何回もした。一向に出ない」

川藤「てか何でこんなことしなきゃいけないすかね？ 俺らの責任じゃねえのに」

上島、修復しながら、

上島「それもそうだし、何でこの4人なのかも疑問だ」

川藤「確かに」

と言って、3人を見渡す。

山川、修復しながら皆に向かって、

山川「いや、しかし、こ、これ放送間に合わなかったら水田さん怒るだろうなく。怒っ

たら怖いすもんね、水田さん」

山川が直している列のすぐ隣に、もう
一列ドミノが並んでいる。

上島「ですね」

山川「あれですよあれ、ば、パワハラ的女議員
員いたじゃないですか。あのく、何だっけ
な、えくつと、富田議員だ！」

上島「（即答で）豊田議員です」

山川「あそうだ豊田議員だ！ このハゲく！

金髪豚野郎く！ つつてね」

上島「それ色々混ざってますよ」

山川「あれそうでしたっけ？」

山川の手が隣の列に当たってしまふ。
瞬く間に倒れていくドミノ。

山川、あたふたして、

山川「うわっ！ やばいやばい！」

彩美「何やってるんですか早く止めて！」

山川「す、すすすいません！」

急いで向かう山川だが、床に並ぶドミノ
が障害となり、もたつく。

山川「あくヤバいどうしようどうしよう！」

上島が倒れ進むドミノに急いでいる。

ドミノが無い地帯に入り、ヘッドスラ

イディングするよう床を滑り、手を伸

ばしてドミノを止める。

安堵する川藤。山川を睨む彩美。

山川「す、すいません。本当すいません！」

俺何やってんだバカ、バカ、バカー！」

と、自分の頭を叩き始める。

上島「山川さん」

山川「はい！」

上島、立体ドミノタワーを見て、

上島「あれが倒れたら、修復は不可能になり

ます」

他の三人もそのタワーを見つめる。

掛け時計の針が早送りで進んでいく。

×

×

×

掛け時計が12時2分で止まる。

上島達4人が汗をかきながら、黙々と

ドミノを直している。

ペットボトル飲料を勢いよく飲み、汗を拭う彩美。周りを見渡し、彩美「結構進んだ。いい調子かも」
山川「このまま頑張れば、か、完成するかもですね！」

と、目を輝かせながら。

彩美「ですね」

上島、ドミノを立てながら、

上島「完全に元通りは厳しいだろ」

彩美、苛立った様子で、

彩美「何だよ」

上島「いやだって、これから一回も倒さない

ならまだしも、現に何回か倒してるんだし」

彩美「本当嫌いだわ、そういう所」

上島「いやでも」

川藤「そういうところありますよね、上島さんって」

上島「うっせえわ」

川藤「お、今流行りの」

上島、真剣なトーンで、

上島「マジで黙れ」

川藤「すいません。あなたが思うより健康です」

と言つて、ニコツと笑う。

舌打ちして、川藤を睨む上島。

彩美「全部完成してなくても、7割ぐらい直せたら現場入りしてきたスタッフに手伝わってもらえばいい。その程度だったら私たちが倒しちやったって事にすればいいし」

川藤、不満げに、

川藤「えく？俺らのせいになるんすか？」

彩美「山川さんがこの現場にいるのは不自然過ぎるから、他のスタッフが来る前にここを出なきゃいけませんね」

山川「あゝ、た、確かに！」

彩美「ていうことは、私も」

川藤「彩美さんAPつすもんね」

川藤、彩美、山川が揃って上島を見つめる。

上島「おいおいふざけんなよ」

川藤、立ち上がり上島に向いて、

川藤「じゃあ監督であり、責任ある立場の上島さん。皆の為に自首してください。恨みっこなしでおねシヤス！」

上島、怒って立ち上がり、

上島「お前なあ！」

と言って、何かに気づく上島。

上島「恨み？」

三人を見る上島。

川藤「な、何すか？」

上島「この中にいるかも、犯人」

川藤「はい？」

上島「ドミノを倒した犯人だよ！」

川藤「えガチっすか！？」

彩美「変なこと言わないでよ」

上島「俺は本気だ」

山川は3人の会話を気にしながら、ドミノを直している。

上島「全員、水田に恨みがある」

彩美「はく？」

少し顔を伏せる川藤。

山川、修復を止め、

山川「なな無いですよ！ 恨みなんて！」

山川、自分のこめかみを叩きながら、

山川「あのう、えうつと、総合格闘技、じゃなくて」

上島「総合演出です」

山川「あくそれです！ この48時間テレビの、総合演出の」

上島「山川さんは闇営業で芸能界を干された。誘ってきたのは、水田さんですよね？」

山川「え！？ ちよ、な何でそれ知って、あヤベ！」

と言って、手で口を押える。

川藤、愕然として、

川藤「ガチっすか？」

彩美「上島さんいい加減にして！ この企画がどれだけ大事か上島さんにも分かるでしょ？ かき乱さないでよ！」

上島「やめろよその上島“さん”って言う

の！ わざとらしくてキモイんだよ！」

彩美「いいじゃん別に、もうただの同僚なんだから」

上島「ただの同僚って、大袈裟だな。まだ離婚したわけじゃないのに」

彩美「心も家も離れてるんだから離婚したみたいなものですよ。てかもう離婚届用意してあるし」

上島、明らかに傷心し、

上島「えちよ、離婚届って、そんな」

川藤「はいそこまで！」

と言って、手を叩く川藤。

山川「ち、チワワ喧嘩は止めましょう！」

彩美「痴話喧嘩な！」

川藤「それじゃ可愛い小犬同士の喧嘩っすよ」

上島「この中に犯人がいたら、直したところでまた崩されるかも。それに、生放送始まって事件とか起こされても困るだろ？」

川藤「確かに」

彩美「また責任逃れ？」

上島「は？」

彩美「いっつもそうよね。保身保身、この企画の監督は上島さんだから責任取りたくな
いだけでしょ？ 新しい番組も始まるしね」

上島「いや、そんな事」

彩美「犯人見つければそいつのせい出来る
もんね」

上島「だから違うって！」

川藤「もうやめましようって！」

彩美、上島に向かって、

彩美「分かった！ 一人で犯人がこの中にい
る説でも話してな。私は直してるから」

と、修復を再開する。

上島「そうさせてもらおうよ」

上島の携帯がバイブする。

取り出して画面を見る上島。

知らない番号からの着信。

上島は首を傾げ、携帯をしまう。

上島、山川に向けて、

上島「山川さん」

山川、修復しながら、

山川「は、はい」

上島「山川さんは嘘のつけない、素直で優しいお人だ。芸風にもそれが出てる。ずっと隠していたのは、辛かったでしょう」

山川「いや、隠してたなんて、そんな」

と、手が止まってしまう。

彩美「山川さん返事しなくて良いんで手動かして下さい」

山川「は、はい！」

と、おどおどしながら直していく。

上島「週刊誌に載ってたパーティーの集合写真。あれに、水田さんが良く行くバーの店長が写っていました」

上島の方を見ないようにしている山川。
悲しげな顔でドミノを立てている。

修復を進める川藤、驚きながら、

川藤「マジかよ」

上島「表向きは後輩芸人に誘われたってなってますけど、実は水田さんに誘われたんで

すよね？」

山川、手を動かしながら、上島と彩美を交互にチラ見する。

上島「この間記事で見ましたよ。地上波の番組に出るのは、約5年ぶりだって。ずっと苦しい思いしてきたはずです」

彩美は山川を睨み、「修復を進めろ」と顎を動かし合図を送る。

山川、おろおろしながら、

山川「それは、それは」

上島「まあいいです。その反応を見れば大体分かります」

川藤「水田さんって、やっぱヤバイ奴だったんすね」

上島「皆知らないだけで、あいつはヤバイよ。川藤もよく知ってんだろ？ 4年前の『つじつまアワー』の時だって」

と言いかけ、彩美が遮って、

彩美「上島さん！」

上島「彩美だって恨みあんだろ！」

彩美「いや私は」

上島「水田にレイプされた」

彩美の表情が無くなっていく。

川藤「えヤバっ！ マジ？」

彩美「何よ、それ」

上島「悪いな。トラウマだろうし、話したくないだろうけど、いつかは話さなきゃ。夫婦だからな」

怒りがこみ上げてくる彩美。

彩美「クソが」

上島のもとに行こうと立ち上がる彩美。

山川「足元！」

ハッとして立ち止まる彩美。

山川「あ、足元、気を付けてください」

下を向く彩美。

つま先の少し先にドミノが並んでいる。

山川「じ、自分が言えた事じゃないですけど」

彩美、立った状態で上島を睨みながら、

彩美「もう夫婦じゃないって言ってるでしょ」

上島「俺はまだ新婚気分だ。彩美、何で相談

してくれなかったんだよ。俺は、悲しいよ」

彩美「その件が起きた時はもう別居してたから。他人に相談する義務無いから！」

上島、感情が高ぶって立ち上がり、

上島「いやそんな言い方！」

山川「足元！」

上島「分かってるよ！」

と、山川に向かって。

山川「すすすすいません！」

と、委縮する。

上島「知り合いのディレクターから聞いたよ。番組の打ち上げで、二次会でカラオケに行ったら。違う部屋で、彩美が襲われそうになってるのを見たって」

力無くその場に座り込む彩美。

彩美、倒れているドミノを見つめ、

彩美「話したくない」

上島「分かった。川藤と俺は知っての通りだ」と言っ
て、川藤の顔を見る。

川藤も上島を見つめ、険しい表情にな

つていく。

上島「お前が大ファンの本橋満里奈。水田の
せいで自殺未遂起こしたろ」

山川「え、どどどういうことですか？」

上島「知らないんですか？ 山川さん」

山川「詳しい話はあまり。疎くてすみません」

上島「ああ、そうですか」

川藤「その話止めましょうよ、気分悪くなる
んで」

彩美が重い腰を上げ、渋々ミノを立
て始める。

山川「うわっ！ そういう事だったんですね」

山川がスマホで調べている。

山川、朗読し始め、

山川「『つじつまアワー』という番組に出演
していたアイドルの本橋満里奈さん。ヤラ
セの演出に従っていた事が判明し、SNSで
大炎上。誹謗中傷や色々なデマも拡散され、
本橋さんは自宅マンション6階から飛び降
り、意識不明の重体に。現在活動休止中」

川藤「その話止めろって言いましたよね！」

山川「あー！ すすすいません！」

と、急いでスマホをしまう。

上島「川藤はファンクラブに入ってるほどだ。

水田の事殺したいぐらいだろ？」

上島を睨んでいる川藤。

彩美がドミノを直しながら、汗を拭う。

目に力を入れ集中を保とうとする彩美。

山川「な、何で上島さんも？」

上島「俺はその番組のディレクターだったんで、半年間の出勤停止。その後は左遷されて、現場で陰口叩かれるは、散々でした」

山川「そうなんですか！？」

上島「本当に何も知らないんですね」

山川「し、知らないですよ。僕もあの事件から、誹謗中傷が酷くて、ネットが見れなくなっちゃったんです」

上島「なるほど。まあとにかく、倫理委員会には僕の独断で演出したことだと伝えました。けど、事の真相が、匿名でSNSに拡散

されたんです」

山川「真相って」

上島「俺がヤラセをしたのは、水田さんの指示だったって言うことです。どのスタッフか分かりませんが、余計なお世話ですよ」

彩美がドミノを直しながら上島を睨む。

山川「そんな。何で本当のこと、言わなかったんですか？」

上島「水田さんに言われたんです。俺の名前は出さなつて。その後のフォローが出来なくなるからつて。水田さんに反旗を翻したら、俺なんか永久追放ですよ」

山川「俺と、同じだ」

上島「え？」

山川を見る川藤。

山川、苦笑しながら、

山川「お、俺も、水田さんに言われました。記者とか警察とかに、俺の名前は出さなつて。俺がこの業界からいなくなつたら、番組に呼べなくなるからつて」

上島、驚いて、

上島「本当ですか？」

山川「お、俺は、信じる事しか出来ません。

馬鹿なんで。け、けど、やっと5年経った

今、この48時間テレビの深夜帯に5分だ

け出れることになりました！ 彩美さん」

と言って、彩美に向く。

彩美「え？」

汗だくで顔色の悪い彩美。

山川「ありがとうございます」

と言って、深く頭を下げる。

彩美、少し気まずそうに、

彩美「いえ、そんな」

少し朦朧としながら、ドミノを直し始

める彩美。

上島、拳を強く握りながら、

上島「山川さんの話聞いて、よく分かった。

やっぱりクズだよ、水田は」

川藤、上島に嫌みっぽく、

川藤「水田に恩売りたかっただけでしょ？」

上島「は？」

川藤「何が『反旗を翻す』ですか。カッコつけたこと言わないで下さいよ。上島さん」

上島「なんだって？」

川藤「本橋満里奈という一人の人生を狂わせたんです。上島さんもそれに加担した。忘れないで下さい」

川藤を見たまま、黙る上島。

川藤「満里奈は俺の生活の一部でした。そんなに推してたんすよ」

上島「いや、俺だって、いくら水田さんの指示だったとはいえ、俺にも責任があることは分かってるよ！」

川藤「あの時上島さんがちゃんと断ってれば、あんなことにならなかつたんすよ！」

上島「怒って立ち上がり、上島「お前、簡単に言うなよ！？ どの立場にも立ったことないお前が！」

川藤も立ち上がって、

川藤「立場なんか関係無いでしょ！」

山川「ちよ、ちよっと！ お二人ともおちち、
落ち着いて！」

突然彩美が勢いよく立ち上がる。

彩美、意識朦朧としながら、

彩美「うるさい、早く、ドミノ・・・」

意識を失い、ドミノの上に倒れる彩美。

波のように、何列も同時に倒れていく。

上島「彩美！」

と、彩美のもとに向かおうとするが、

倒れて行くドミノを見て立ち止まる。

山川「うわ！ やばいやばい！」

と、慌てて止めに行こうとするが、足

元のドミノを蹴ってしまう。

山川の足元からさらに倒れていく。

山川「あくどうしようどうしよう！ 最悪だ

く！」

川藤、倒れるドミノに向かいながら、

山川の方を見て、

川藤「何やってんすか！」

倒れて行くドミノは、徐々にアリーナ

中心にある立体タワーに近付いていく。
上島が足元に気を付けながら、急ぎ足
で倒れるドミノに向かっていく。

上島「山川さん落ち着いて！ 動かないでく
ださい！」

山川、涙目で、

山川「すすすいません！」

と、変な体勢で硬直する。

彩美から倒れ始めたドミノが進んでい
る。上島がそれを止めようと腕を入れ
るが、先のドミノが崩れてしまう。

上島「クソ！」

上島は強引に腕で列をなぎ倒し、ドミ
ノの波を止める。

山川が蹴ったドミノが倒れ進んでいる。
川藤が上島と同じように、なぎ倒すよ
うにドミノを止める。

山川、両手で頭を抱え、怯えるように、
山川「ごめんなさい、ごめんなさい・・・」
と、くり返しながら。

彩美のもとに上島が駆け付ける。

上島、彩美を抱きかかえ、

上島「彩美、彩美！」

目を開けない彩美。

川藤も彩美のもとに駆け付ける。

川藤、焦りながら、

川藤「だ、大丈夫すか！？」

上島、彩美を揺さぶりながら、

上島「しっかりしろって、彩美！」

川藤、携帯を取り出し、

川藤「救急車、救急車」

上島、川藤に向かって、

上島「ダメだ！」

川藤「は？」

上島、悩み始め、

上島「いやちよっと待て。クソ、どうしよう」

川藤「何迷ってるんですか？」

上島「機密事項って言ったろ！ 水田さんが」

川藤、顔を引きつらせ、

川藤「いや、さすがにヤバいっしょ、これは」

上島「この件には事件性がある。バレたら番組自体が終わる」

川藤「いや、だからって」

山川、突然大声で、

山川「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ーい！ー」

驚いて山川に振り向く上島と川藤。

山川「僕がいけないんです僕が！僕のせいで争わないで下さい。喧嘩は止めましょう。
本当嫌いなんで」

上島と川藤が怪訝に山川を見つめている。
彩美が目を開く。

川藤、それに気づき、

川藤「彩美さん！」

上島も彩美を見て、

上島「彩美！大丈夫か！」

彩美「大丈夫、多分、ただの熱中症」
安堵する上島。

上島「良かった」

上島、川藤に向かって、

上島「とりあえず、管理事務所に連れて行く。休める所があるかも」

川藤「は、はい！」

彩美を心配そうに見ている山川。

○同・救護室・中

上島、川藤、管理人の3人が、彩美が横になるベッドの横に立っている。

管理人「本当に良いんですか？ 救急車呼ばなくて」

彩美、苦渋の表情で、

彩美「本当に、大丈夫なんです」

心配そうに彩美を見つめている上島と

川藤。彩美、上島に向かって、

彩美「ごめん、本当に。迷惑掛けちゃって」

上島「全然。無理しないで、ゆっくり休んで」

○同・アリーナまでの通路

上島と川藤がアリーナに戻っている。

電話を掛けている上島。

上島、電話を切り、

上島「ダメだ。出ない」

川藤「これ、絶対なんかおかしいっすよ」

上島「分かってるよ。最初からおかしいだろ」

川藤「水田さんの電話一向に繋がらないし、

もう他のスタッフに連絡しましょう。応援

呼びましょうよ！」

上島「何か考えがあるんだって！ 水田さんにも」

○同・アリーナ・中

扉が開き、上島と川藤が入ってくる。

上島が山川を見て、目を細める。

電話している山川。

近づいていく上島と川藤。

上島「山川さん？」

山川、電話しながら、

山川「あのお、48時間テレビの、ドミノ企

画の件の件なんですけど」

上島「ふざけ」

と言つて、山川に駆けていく。

山川「今頑張つて直してはいるんですけど、
はい、はい、え？」

上島が山川の携帯を奪い取る。

山川「ちよ、何やってるんですか！」

上島、通話を切つて、

上島「こっちのセリフですよ！ 何勝手に電
話してるんですか！」

山川「し、知らない番号から連絡があつたん
で、掛け直してみたんです。そしたら水田
さんで」

上島「水田さん！？」

川藤「ガチっすか！？」

上島、怪訝に眉をひそめ、

上島「知らない番号？ あれ？」

山川「もう限界でしょ！ 水田さんに応援呼
んでもらおうと思つたんです。秘密基地な
んて言つてられないでしょ！」

川藤「機密事項な」

山川「て、つててていうか！ 水田さん知ら

ないって言ってました！ このこと」

上島「え？」

川藤「知らないって、どういうことっすか？」

上島の携帯が鳴り、取り出して画面を見る。知らない番号からの着信。

川藤、それを見て、

川藤「うわっ、それもしかして」

山川、上島の携帯画面を見て、

山川「あ、同じ番号かも！」

恐る恐る、電話に出てみる上島。

上島「はい。上島です」

水田の声「おい上島、おせえよ、早く出るよ」

上島、緊迫の表情で、

上島「水田さん、ですか？」

上島の携帯に耳を近づける川藤と山川。

水田の声「そうだよ。びっくりしたよ、起き

たら携帯無くなってさ」

上島「そうだったんですね」

水田の声「ていうことで、もし何かあったら

これに掛けるように。って、彩美にも言っ

といてくれ。じゃ」

上島「待って下さい！」

水田、イラつきながら、

水田の声「何だよ」

上島「えーっと、その」

水田の声「早くしろよ時間ねえんだよ！ 色

んな人に連絡しなきゃなんだからさ！」

上島「すいませんすいません！ ドミノ企画、

もう大丈夫ですか？」

川藤と山川、緊迫の表情。

水田の声「は？ ドミノがなんだよ」

上島「あいや、すいません。間違えました。

では、失礼します」

水田の声「じゃ」

と、電話を切られる。

呆然としている上島。

川藤「水田さん、マジでこの件知らなかった
んですか？」

上島「水田さんの携帯は、盗まれたんだ」

川藤「は？」

山川「え？ 誰にですか？」

上島「ドミノを倒した犯人ですよ。俺に来た電話は、水田さんじゃなかった」

川藤「え、でも、水田さんの声は」

上島「電話に出たらすぐに切られた。声は聴いてない。その後すぐにあのメールが来た」

川藤、驚愕し、

川藤「マジかよ」

山川「えー！ じゃあ誰が送ったのあれ！

怖いよ怖いよ！」

上島、頭を両手で抱えクシャクシャに
して、

上島「マジどうなってんだよ！」

川藤「もうわけわかんねえ」

山川「ちよっと待って、じ、じゃあ応援呼べるじゃないですか！ すぐにか、掛け直して、全部素直に話しましょうよ！」

上島「いや」

川藤「そうですよ。何迷ってるんですか？」

上島「お前らは良いよな！」

と、急に怒鳴る。

川藤と山川、ビクツとして、

川藤「うわっ、びっくりした」

上島「大した責任追わなくていいからな！」

川藤「いい加減にしてくださいよ。番組ポシヤつたらどうすんすか！」

上島「俺ら三人で、直せる所まで直す。せめてもの土産として、犯人も特定する」

川藤「ヤバ」

山川「そんなの無茶ですよ！」

上島「新しい番組始まるんですよ！ 水田さんの口利きで決まった番組です」

上島を見ながら、川藤の顔が引きつっている。

上島「ドミノが倒されたのは、俺の管理不行き届きです。犯人が特定出来なかったら、

俺が犯人みたいなもんなんですよ」

山川「そ、そんなことないですって」

上島「俺は、取らなくていい責任は、絶対に取らない」

上島、川藤に向かって、

上島「あのヤラセ事件から、そうした方が良
いって学んだんだよ」

上島を睨んでいる川藤。

上島を悲しげに見つめている山川。

掛け時計の針が早送りで進んでいく。

×

×

×

掛け時計の針が14時6分で止まる。

上島、川藤、山川が黙々と修復を進め
ている。

山川「あ、彩美さん、大丈夫ですかね？」

上島「大丈夫でしょう。保健室みたいなこ
ろで休んでるんで」

川藤「上島さん・・・」

上島「何だ」

川藤「俺が一番憎いのは、水田や、上島さん
じゃありません」

上島「どういうことだ」

川藤「俺が一番憎いのは、何の責任も感じな
いで、顔も名前も隠して人を崖っぷちまで

追い込む奴らです」

黙って川藤を見つめる上島。

川藤「上島さんも、そういう奴らと同じになりたいんすか？」

上島「そんなわけないだろ」

川藤「じゃあ、水田さんに連絡しましょう」

上島「ここだけで終わらせた方が良く」

川藤「黙ってても、いいことないっすよ」

上島「・・・」

山川「あ、あの」

川藤「何ですか？」

山川「ぼ、僕の、闇営業がばれて、ネットで毎日言葉の戦争でした。矛先は僕だけじゃなくて、色んな所で飛び交って、関係ない所でも、戦争が起きてました。僕のせいで争ってほしくないのに。だから毎日毎日、本気で、最悪の事を考えてました」

山川を悲しげに見つめている川藤。

上島も真剣に見つめている。

山川「えーっと、橋本満里奈さんも」

川藤「本橋です。本橋満里奈」

山川「ああ、すいません。も、本橋さんの気持ちも、それに怒る川藤さんの気持ちも、僕は、よく分かります」

山川、上島を見つめ、

山川「う、上島さんが、悪い方に加担しないことを、願ってます」

山川を見つめる上島。

扉が開き、彩美が入ってくる。

山川「あ」

上島「彩美！」

川藤「彩美さん！」

じっとり汗をかき、顔色の悪い彩美。

上島「もう、大丈夫なのか？」

彩美、座り込み、修復を始めて、

彩美「大丈夫。私も手伝わないと、一応」

上島、彩美を見ながら眉をひそめ、

上島「いちおう？」

彩美「だって、もう応援来るじゃん」

上島「は？」

川藤と山川も彩美を見る。

彩美「さつき私にも連絡来たよ。ミズミズ、

あいや、水田さんから」

上島、驚いて立ち上がり、

上島「おい、どういふことだそれ」

彩美「上島にも連絡したって言ってたけど。

ドミノが倒されてたこと報告しなかったん

だね」

上島は彩美を睨み、拳が強く握られて

いく。

彩美、少し悲しげに、

彩美「変わらないよね、本当。呆れたよ。ま

あ、あんたが何と言おうともう他のスタッ

フが来るから」

山川、安堵して、

山川「良かった」

彩美「水田さんブチ切れてたよ？ 何でもっ

と早く報告しなかったんだ、って」

上島、彩美のもとに行き、胸倉を掴み

上げる。

山川「上島さん！」

川藤「ちよつと！」

上島「ふざけんな、もっと良い方法があった
だろ！」

彩美、鼻で笑いながら、

彩美「何それ？」

上島「犯人だって、犯人だってどうせこの中
にいるんだよ！ 彩美が報告する前に、俺
が見つけれられたら」

彩美「犯人なんかどうでもいいでしょ。それ
警察の仕事、私たちの仕事じゃない。私た
ちの仕事はこのドミノを完成させて番組を
無事成功させること。本末転倒なこと言わ
ないで、ガキじゃないんだから」

上島が彩美の胸倉を掴みながら、睨ん
でいる。

彩美「あと、確実に言えることがある。私は
犯人じゃない」

上島「は？」

川藤「え？」

山川「な、なんで？」

彩美「黙っておこうと思っただけど、上島さんがそこまで犯人に拘るなら、まあ、いいか。私ミズミズ、いや、水田さんと不倫してた」

上島「は」

山川「え〜！」

川藤「マママジか！」

上島は呆然とし、彩美の胸倉を掴む両手を下ろしていく。

上島「何言って、るんですか？」

彩美「言った通りだけど。上島さんの知り合いのディレクターが、カラオケで見たって言ってたやつ、あれ違うから」

上島、徐々に後ろに下がりながら、

上島「違う、って？」

川藤「うわっ、マジか」

山川「き、き聞かない方が良い！」

上島「何だよ、それ」

彩美「あれは、まあ、イチャついてただけ、ていうか」

上島「イチャ」

彩美「あんたの知り合いが襲われてたって、勘違いしたんでしょ？」

彩美、軽く照れ笑いを浮かべ、

彩美「ミズミズ、抵抗されるの、好きだから」

山川「え、ミミズ？」

上島の呼吸が荒くなっていく。

上島、徐々に下がりがら、

上島「嘘だ」

上島の足元にドミノが近づいてくる。

上島「嘘だ、いつから」

彩美「2年前ぐらい？」

上島「に！ にねん」

川藤「上島さん危ない！」

山川「ど、ドミノ！ 足元！」

意識を失いそうになり、後ろに倒れて行く上島。

その下にはドミノが並んでいる。

上島に駆けていく川藤。

上島を冷たく見つめている彩美。

川藤が寸前の所で上島を抱きかかえる。
上手くドミノの列の間に足を入れ、踏
ん張っている川藤。

川藤「上島さん、しっかりしてください！」

上島「川藤」

山川も上島のもとに駆け寄る。

川藤と山川で上島を持ち上げ、床に座
らせる。

彩美「まあ、そういうことだから。私犯人じ
やないんで。後は三人で言い争って下さい」

と言って、修復を再開する。

川藤「上島さん、大丈夫ですか？」

山川「救護室、行きますか？」

と言って、上島の飲料を差し出す。

上島「大丈夫、です」

勢いよく飲料を飲む上島。

何食わぬ顔でドミノを直し続けている

彩美。

上島「不倫してたって言うことは、もう」

彩美「もう別れた。振られました。笑えば？」

上島、鼻で笑い、

上島「あっそう。じゃあ、お前が犯人の可能性もまだあるな」

彩美「は？」

上島「振られた腹いせに、ってな」

彩美、舌打ちして、

彩美「んなこと言ったらあんたが一番怪しいじゃない！」

上島「俺は」

彩美「水田さんはあんたらが思ってるような人間じゃない。本当は良い人なの！」

川藤「（半笑いで）まさか」

彩美を見据えている山川。

彩美「皆に厳しく当たるのは、番組の為。それは、皆の為でもあるの」

山川「そそ、そんなの、良いように捉えてるだけだ！」

彩美「山川さんを営業に誘ったのは、水田さんの心からの善意。水田さんも、反社が関わってるなんて本当に知らなかった」

山川「お、俺だって、そう言われたよ。さ、最初は、最初は信じてたけど」

彩美「今回山川さんの出演を依頼したのは、水田さんに頼まれたからです」

山川「そ、そんな。もう分かんないよ！ だ、誰を恨めばいいんだよ！」

彩美「上島と川藤は本当によく頑張ってるって、ミズミズいつも言ってた」

上島「嘘だ、あんなの善意じゃない」

彩美「一番悪意があるのは、あなたよ。上島さん」

上島「何？」

彩美「上島がヤラセをしたのは、良い演出を追い求めて厳しくした自分の責任でもあるけど、俺の指示じゃないって」

川藤、驚いて上島を見る。

上島「そんなわけないだろ。SNSでも晒されただろーが。あいつが指示したんだよ！」

川藤の携帯が鳴る。電話に出る川藤。

川藤「もしもし？」

彩美「本当だって、だから今でも上島さんの
事気にかけてくれてるんじゃない！ 水田さ
んのおかげで、新しい番組も始まるし」

上島「彩美、お前騙されてるよ。あいつはペ
テン師だ」

彩美「別にいいよ、ペテン師でも。水田さん
になら、騙されてもいい」

上島「・・・」

彩美「上島さんは変わっちゃった。水田さん
と違って、悪い騙し方をするようになった。

水田さんがしているのは『演出』で、あな
たの方は、ただの『嘘』」

傷心して、俯く上島。

愕然とした表情で電話している川藤。

電話を切り、上島を見る。

川藤「本当の悪人は、水田じゃない。上島だ」
彩美「どういうこと？」

川藤を見る上島。

携帯を見ながら、画面をスクロールし
ている川藤。

川藤「今、ファンクラブの友人から連絡がありました。満里奈の弁護士が、特に酷かったアカウントを特定したって。その個人情報報が、ネットに出回ってます」

上島「え？」

愕然とする上島。

川藤「色んなデマを広げたり、酷い誹謗中傷を投稿していたのは、複数のアカウントを使い分けた同一人物でした」

上島が無表情で川藤を見ている。

川藤「しかも、ヤラセの告発ツイート。あれも同じ人物だったそうです」

彩美、恐る恐る上島を見つめ、

彩美「嘘でしょ？」

川藤「ヤラセも水田さんの指示じゃない。上島さんが独断でやった。そうでしょ？」

川藤の携帯画面。

SNSのタイムラインで上島の写真が出る。回り、コメントが荒れ炎上している。
『#上島D』『#ヤラセ』『#つじつ

まアワー』等とついている。

山川「上島さん？ 本当ですか？」

上島「違う、俺じゃない」

川藤「全部あんたがやった、認めるよ！」

と言って、ウエストポーチからカッターナイフを取り出し、上島に向けて刃を伸ばす。

彩美「川藤君！」

険しい表情で川藤を見る三人。

上島「どういふつもりだ、川藤」

川藤「本当のこと、全部話せ」

と言って、上島に近付いていく。

山川「か、川藤君それは違うと思う！」

川藤、涙を堪えながら、

川藤「俺の満里奈返せよ！」

上島「頼む、落ち着いてくれ」

上島は立体タワーに近付いていく。

川藤「何でそんなことしたんだよ。満里奈は

関係ないだろ！」

彩美「やめて川藤君！」

立体タワーの目の前に着く上島。

上島「俺の事を刺そうとしたら、このタワーも倒れるぞ？」

川藤「別にいいよ、そんなの」

上島「・・・」

川藤「分かった。責任転嫁か、そうだろ？

ヤラセ事件の矛先が自分に向かないため

に、満里奈と、水田さんを生贄にした。本当は全部自分がやったのに」

上島に迫っていく川藤。

川藤「何とか言えよ！」

上島「言ったろ？ 取らなくていい責任は、

絶対取らないって」

川藤「お前、ふざけやがって」

と言って、上島に突っ込んでいく。

上島は横に逃げようとするが、床にはタワーに繋がるドミノが並んでいる。

山川が川藤のもとに向かうが、途中でこけてドミノを豪快に倒す。

彩美が床のドミノなど気にせず、上島

のもとに駆けていく。

上島「やめろ！」

カッターを持ち、上島に迫ってくる川藤。彩美が走って来て、上島と川藤の間に入る。川藤が彩美を刺してしまう。そのまま川藤、彩美、上島はドミノの様に倒れ、後ろのタワーに突っ込んでいく。タワーは一瞬にして、雪崩のようになり崩れていく。

呆然とその光景を見ている山川。

床に倒れ込みながら、彩美を見て怖い
ている川藤。

彩美の腹部にカッターが刺さっている。
意識はあるが、放心状態の彩美。

彩美の下敷きになっている上島。

上島、彩美を抱きかかえ、

上島「彩美、彩美！」

彩美の腹部に刺さったカッターと、流れ出る血を見る上島。そして自分の手を見ると、血まみれである。

山川が我に返り、携帯を取り出して1
19番に掛ける。繋がって、

山川「も、もしもし！」

彩美、上島を見て朦朧と、

彩美「ごめん、竜彦」

上島「彩美」

憤怒の表情で、川藤を睨む上島。

呆然としている川藤。

上島が川藤に殴りかかる。

川藤「ごめんなさい、ごめんなさい！」

上島は川藤に馬乗りになり殴り続ける。

上島「また余計な責任、取らされんだろー

が！」

山川「と、ととにかく早く来てください。お

願いします！」

と言って、電話を切る山川。

川藤を殴り続けている上島。

山川が上島を羽交い絞めにし、川藤か

ら引きはがす。

上島は山川を払いのけ、突き放す。

上島「分かってんだよ。お前が犯人だろ」

山川「は？ な、何言ってるんですか！」

上島、山川の胸倉を掴み、

上島「皆の話を聞いてるうちに、分かった。

水田から直接被害を受けたのは、あんただけだ」

上島を睨んでいる山川。

上島「それと、俺がさっき倒れた時、救護室に行くかどうか聞いたな？」

×

×

×

(フラッシュバック)

山川、床に座り込む上島に向かって、

山川「救護室、行きますか？」

と言って、上島の飲料を差し出す。

×

×

×

(現在のシーンに戻り)

山川「きゅ、給湯室？ そそれが、なななんですか？」

上島「何で救護室なんか知ってただよ！ 俺と川藤はこの体育館にそんな場所があるな

んて知らなかった」

×

×

×

(フラッシュバック)

上島と山川、ドミノを直しながら、

山川「あ、彩美さん、大丈夫ですかね？」

上島「大丈夫でしょう。普通に話せてましたし、保健室みたいところで休んでるんで」

×

×

×

(現在のシーンに戻り)

山川「そそそそれは、さ、最初に言ったじゃないですか！ ここに来る時に迷ったって。その時救護室を通りがかったんですよ。それで覚えてて！」

上島「じゃあ何で彩美が倒れた時にそれを言わなかったんだよ！」

険しい表情で睨んでいる山川。

上島「早く答えろよ！」

山川の表情が一変し、冷淡な雰囲気。

山川、深い溜息を吐き、淡々と、

山川「そうだよ、倒したのは俺だ。水田の携

帯盗んでお前に連絡したのも、エアコン壊したのも、お前のアカウントを特定したのも全部俺らだ」

上島、山川の変貌に驚愕して、

上島「お前、一体」

山川「観覧席の下に何台もカメラを仕込んである。後で編集してネットに投稿する。俺らが今までここでやってきた事、話した事全部世界中に晒すんだよ」

山川の胸倉から手を離す上島。

怯えるように観覧席を見渡す。

ここからカメラは見えない。

上島、愕然としながら徐々に後ろに下がっていく。

山川「水田の事は徹底的に調べた。結局、俺を営業に誘ったのが善意なのか悪意なのかは分からなかった」

上島、怯えるように山川を見ている。

ドミノを踏んで滑り、尻餅つく。

山川「言葉の戦争には苦しんだ。それは本心

だ。天然キャラは演技だったけどな。俺らは同じ辛い経験を得て、繋がったんだ」

上島「俺、ら？」

山川「仲間はもう一人いる。カメラに向かって手振りな」

と言って、観覧席に向かって手を振り始める。

山川「復讐しようって、誘ってくれたんだ。この計画も演出も全部やってくれた。最初からずっと観てるよ。満里奈」

愕然としながら観覧席を見る上島。

観覧席の下に、遠くから見えないようにカメラが仕込んである。

上島の目の前に行き顔を覗き込む山川。
上島が後ろに下がろうと手を動かし、ドミノに当たる。一列が倒れて行く。

山川「水田やお前なんかより、ずっと良い演出だと思わないか？」

上島「・・・」

山川「これからお前は、俺らより酷い地獄で

生きていくことになる。今後、SNSは絶対に見てほしい。集団って言うのは怖いぞ」

倒れ進む一列のドミノ。

山川「何かのきっかけで、一気に倒れて行く。話は肥大化して、極端になり、架空の話まで飛び交うようになる」

倒れ終わる一列のドミノ。

山川「じゃあな」

と言って、歩き出す。

周りを見渡す上島。

意識を失い、仰向けで倒れている川藤。顔は大きく腫れ、血も出ている。

仰向けで倒れ、目を閉じる寸前の彩美。

血は床に広がっている。

上島「俺は、直さなかった」

山川、立ち止まり、上島に振り返り、

山川「直さなかった？」

上島「ずっと逃げてきた、色んな事から。水

田さんには、最初から負けてたんだ」

山川「・・・」

上島「倒れても、立て直せばよかったのに、俺は直そうとしなかった。もっと早く、直してればよかったのに」

山川「何だよつまんねえな。最後まで言い訳しろよ」

と言って、また歩いていく。

外に通じる非常口から出ていく山川。

入り口扉が開き、多くのスタッフが駆け込んでくる。

上島は呆然と座り込み、うな垂れ、倒れているドミノを見つめている。

一つドミノを手に取り、立てる。

〈了〉